

[020]九州大学ビジネス・スクールニューズレター

<https://hdl.handle.net/2324/2230277>

出版情報：九州大学ビジネス・スクール ニューズレター. 20, pp.1-, 2014-05. 九州大学ビジネス・スクール
バージョン：
権利関係：



編集発行▶九州大学ビジネス・スクール 担当▶QBS支援室 住所▶〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1 電話▶092-642-4278
 メールアドレス▶bs@econ.kyushu-u.ac.jp f▶facebook.com/QBS.MBA

専攻長あいさつ



平松 拓 専攻長

QBSは、この春、大学基準協会の認証評価において、第2回目となる基準適合との認定(期間5年間)を取得し、また、12期生を迎えて新たな年度をスタートしております。昨年4月に専攻長に就任して以後の1年間のQBSの活動を振り返ると、様々なイベントが目白押しの密度の濃い12か月でした。

まずはQBSの「アジア事業強化」プロジェクト。夏にアジア・ビジネス教育拡充のための教材開発が動き出し、秋と春にそれぞれ大連理工大学・東北财经大学とKAISTを訪問したICABE学生スタディー・ツアーでは、相手校学生との交流活動として実施したビジネス・プランのワークショップは内容充実したものとなりました。

また、秋にはJASSO奨学金プログラムに採択されて最初の交換留学生12名がQBSの門を叩き、日本人学生と切磋琢磨する半年間の学習がスタートしました。更に冬には第4回の短期エグゼクティブ・プログラムがスタート、南京大学ビジネス・スクールの学生約20名のための短期セミナー受け入れ、交換留学修生のネットワーク作りなど、将に学生、教員共にアジアに向き合った年となりました。

同時に、3回目を迎えたビジネスプラン・コンテストでは学生主体の運営の下、協賛企業のPRがJR博多駅ビルの大スクリーンに登場したり、年度を締めくくるQBSフォーラムも第7回目を迎えて例年に増して粒よりの個人研究プレゼンが出揃うなど、しっかりと根を張った活動となってきました。この他にも個々の学生による自主的な活動など、枚挙に暇がありません。

これだけ多くのことに、僅か100名程度の学生・教員中心に取り組む中での認証評価の受審でしたが、九大ビジネス・スクールの伝統に裏付けられた総合力が好評価に繋がったのだと思います。

しかし、ここで満足して立ち止まるわけには参りません。本年度を更なる前進の5年間のスタートの年とすべく、引き続き皆さんと共に着実な前進を目指して参りたいと思います。

第20回 ICABE学生交流プロジェクト(韓国KAIST訪問)

2014年の春のICABEは平松専攻長、岩下講師の同行のもと、韓国ソウル特別市へ訪問いたしました。

3月14日・15日、KAIST(Korea Advanced Institute of Science and Technology)においてビジネスプランのグループディスカッションと両校教員・学生懇親会を、そして現地企業視察では、孫会社にあたるLINE福岡が日本国内第2の拠点を福岡市内に建設中である韓国最大手のウェブサービス会社NAVER株式会社と、韓国最大の企業であるサムスン電子の広報館「サムスン・デライト」への訪問を行いました。

韓国ソウルの二大市場の一つである東大門市場は深夜も賑わいを見せ、雑多な屋台と近代的なファッションビルのコントラストが非常に印象的な都市でした。その賑わいからも、わが国同様に資源が乏しく国土面積が小さい韓国が、「国策」により大きく成長を遂げているのだということを感じることができました。

現地企業視察においては、NAVERでは本社社屋は社員が働きやすい職場環境を追求されると同時に、地域住民との共生や環境に配慮した設計になっているなど、非常に機能的で且つ創造性に溢れる空間になっていることを印象深く感じました。またサムスン電子広告館は最先端技術を用いた体験型の施設となっており、我々以外にも中国人の団体客が多く訪問していました。今回訪問した2社共にグローバル企業としてソフト・ハードの両面から世界を牽引している企業であることが伺えました。

大学交流においては、今回交流会に参加されたKAISTの学生は国籍が様々であったことにまず驚かされました。KAISTのMBAコースはすべて英語にて開講されていることもあり、世界中から短期間の留学生としてではなく一般のフルタイムMBAとして学生が集まっており、日頃からグローバルな意見交換が行われていることが伺えました。今回は韓国と日本の交流のみならず、様々な国の価値観の中でビジネスプランを中心とした意見交換が行われたことは、我々にとっても非常に稀な機会でした。二次資料から得られる情報だけではなく、参加者それぞれが世界中の優秀な学生との実際の議論を通じ経験・知識を得る事ができた事は大変意義深いと感じました。

木村 有希(11期生)

経営系専門職大学院 認証評価

九州大学ビジネス・スクールは、大学基準協会より、『経営系専門職大学院認証の適合認定』を取得しました。今回QBSが取得した認定の有効期間は、平成26年4月1日から平成31年3月31日までの5年間です。



QRECによるアントレプレナーシップ教育

皆さんは、アントレプレナーシップという言葉を知っていますか。この分野で世界をリードする米国バブソン大学経営大学院のディーンは、「あなたはアントレプレナーシップをどう定義するか？」との私の問いに対し、「現状維持に対する挑戦である」と答えた。アントレプレナーシップは、必ずしも起業にまつわる事柄だけを指すものではなく、既存企業、行政機関、NPO、はたまた大学のような教育機関にも広く求められるものなのである。

さて、2010年12月に設立されたQREC(九州大学ロバート・ファン/アントレプレナーシップ・センター)は、既に全学に対して約30ものアントレプレナーシップ関連科目やプログラムを提供している。常識を疑い、自らの固定概念を取り払ってユニークな視点で世の中を観察すると、危機と思っていたことがむしろ機会に見えてくる。そのような機会を積極的に捉え、新しい挑戦によって社会に変革と新しい価値をもたらすアントレプレナーシップ教育をQRECは担っている。

これまで、QREC科目を履修した大学院生の約4割がQBS生である。QBS在学中には、QBS提供科目もさることながら、QRECが保有する教育資源の恩恵を最大限に享受し、現状維持の打破と新たな価値の創造に貪欲に挑戦して欲しいと願っている。

高田 仁(産学連携マネジメント、QREC複担教員)



STI政策専修コースについて

私は平成24年度から「科学技術イノベーション政策教育研究センター(CSTIPS)」の責任者を兼務しています。このセンターは、文部科学省の「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点整備事業に本学の構想が採択されたことを受けて設置された学内共同教育研究施設です。同事業の主な目的は、客観的なエビデンスに基づいて政策を立案・実行できる人材を育成することであり、これを遂行するため

CSTIPSは大学院共通教育科目10科目からなる「科学技術イノベーション(STI)政策専修コース」を開講しました。

このコースの特徴の一つは、新たな融合領域の教育プログラムであることを反映して、多くの科目が多様な専門分野から結集された先生方によるオムニバス形式の講義で構成されていることです。学内では経済学研究院の他、法学、理学、工学、医学、農学、比較社会文化の各研究院等から最先端の研究課題に取り組んでいる先生方に参画頂き、それぞれの専門分野の知見に立って科学技術イノベーション政策の課題を論じて頂いています。

このように異分野の卓越した知性に出会う機会があることは、九州大学のビジネス・スクールで学ぶ皆さんにとって大きな利点となるものです。上記コースの科目は全て社会人学生が履修可能な時間帯に配置されており、既に多くのQBS学生が受講しています。皆さんの更なる意欲的な参加を期待しています。

永田 晃也(イノベーションマネジメント、知識マネジメント)



QBS BOOKレビュー

この1冊

『原価計算』

監修:岩崎 勇

(文部科学省検定教科書:東京法令出版)

資源の少ない我が国は、以前から基本的に資源を輸入し、加工し、製品として海外に輸出することによって大きく発展してきた。このように、我が国は産業を発展させることによって生活を豊かにしていこうという産業資本主義的な考え方に基いて成長してきた。この産業を支える中心の1つが製品の製造・販売を行う製造業(メーカー)である。そして、世界でも最先端の製造技術を誇る我が国のメーカーの健全な成長を支えてきたのが、原価計算を中心とする管理会計である。経営者が顧客ニーズに合った製品を市場に提供するためには、その前提として、市場価格はいくらなのか、それを製造し、利益を上げていくためにはいくらで製品を製造しなければならないのかなどを知り、製品の生産計画を立て、それを実行しなければならない。原価計算の助けを借りて経営者は、計画通りに製品が製造されているのかを常に把握し、必要に応じて適切な措置を講じなければならない。原価計算は管理会計で中心的な役割を果たしている。そして、この管理会計は、製造業に限らず、サービス業等においても企業経営に必須の手段として利用されている。「原価計算」を学ぶことによって、「具体的な数値で企業活動の状況を把握できるという能力を付けること」は、経営者等にとっても必須な能力である。

岩崎 勇(財務会計、コーポレート・ガバナンス)



短期エグゼクティブ・プログラム

2013年度は第4回短期エグゼクティブ・プログラムを行った。短期エグゼクティブ・プログラムは2009年度からCREAパートナーズの支援を得て始めたもので40-50歳台の企業幹部を集めて11月から3月の日曜日に12回行うものである。場所は一度だけ箱崎で行ったが後は全て博多駅である。2013年度は、トヨタ、住友商事、正興電機、新日本監査法人等の1回目からの常連に加えて、日本電気・日本電気ソフトウェア・BCC、佐賀県、JR九州、パナソニック、戸上電機等18名が参加した。今回は参加者に早めに仲良くなってもらうために大連・瀋陽視察旅行を12月末とこれまでより早めにした。参加者には瀋陽の東北大学のビジネススクールと交流を行ってもらった。大連には飛行機で飛び、大連と瀋陽はできたばかりの高速鉄道で往復した。QBSからは平松・永田・高田・朱・岩下先生と私が参加し、古川先生、国吉先生、京大の木谷先生、慶応の飯盛(いさがい)先生、流通科学大学の森先生にも講義をお願いした。新年会には交換留学生と交流セッションを行った。今年も個人プロジェクトを行い、大津留先生、平松先生と私の3回の指導会を経て最終日にプレゼンテーションを行ってもらった。

村藤 功(企業財務、企業価値創造とM&A)

リカレント聴講制度を利用して

卒業して5年経過したらリカレント聴講制度を利用しようと決めていた。私にとってQBSは港のようなものだ。理論と実践の狭間にある大海原の荒波を幾度も潜り抜け又何度も打ちのめされて来た身にとって適度なスパンでの相応の修理、補給、休息等は必須だった。

MBAが学位に過ぎずその評価は実社会での活躍次第である事は言うまでもない。事実各界で活躍されておられる卒業生・関係者は多いと思う。同時に懐かしい学び舎の風評も聞こえてくる。人間心理は古代エジプトの例通りだが、暫く振りに現役の教室に身を置いてみると、我々が在籍していた時と同じように、期独特の雰囲気醸しつつも、希望と情熱に満ち溢れた空気感は何ら変わっていない。

一方、施設や制度は確実に良くなっている。受講済みの講座であっても最新の研究成果が反映されているだろうし、自らの捉え方が異なるのであれば成長の証左でもあろう。

世知辛い世の中。理不尽な事は多々あると思う。だからこそ信頼出来るものは一層大切にしていきたい。2年間又はそれ以上の共通体験を持っている関係者にはその資格があると思っている。

最後に一つだけ懺悔したい。未熟者故に現役の後輩諸氏に先輩の優秀な所を見せる事ができなかった事は心残りだ。怠惰な俗世の垢に染まりきっていたのが原因であるが、優秀な先輩・後輩諸氏におかれては、反面教師として是非とも先輩の範を示して頂ければ幸甚だ。

末筆ながらQBS及び関係者様の益々の御発展を祈念致します。

寺松 一寿(4期生)



QBSの修了生は、リカレント聴講制度を利用して、修了した後もQBSの講義を受講し、知識の刷新を行うことができます。
※2013年4月から、入学料が不徴収となりました。

修了生紹介



足立 憲正さん(10期生)

所属▶(株)安川電機

「変化し続けているか?」

QBSを修了して早二ヶ月が経ちました。怒涛のように流れた二年間、本当に学ぶことが多かったです。

その中でも特にプロジェクト論文は印象に残っています。私は「日本メーカーの電気製品(太陽電池パネル)のシェアがなぜ中国メーカーに奪われてしまったのか」というテーマで朱先生の指導の下、論文に取り組みました。その中で外部環境に合わせて、日本メーカーが迅速に設備投資、材料調達を出来なかった姿が浮かび上がりました。一方で中国メーカーは経営者の素早い意思決定で自社を柔軟に変化させていきました。論文では厳しいビジネス環境の中で会社が変化して行かなければならない、という考察を得ました。

では果たして私個人として自分自身が「変化し続けているか?」と自問自答してみると、お恥ずかしいながら答えはノーです。更に日々自分を磨き、良い方向に変化し続けなければならないと感じます。

自分自身が変わり続けることが、QBSで学んだことを会社、そして日本社会に還元させることだと信じています。



石松 かおるさん(10期生)

所属▶(株)麻生

QBSに入学した当時は、外国人経営者と接する機会が多くあり、日本人経営者と外国人経営者の経営に対する考え方の違いを日々感じていました。仕事を進めるにあたり、彼らの考え方を理解するための基盤が必要であると強く感じ、QBS入学を決めました。

MBA課程を学ぶことは、最初の一步に過ぎないとは思いますが、経営者の視点を学ぶ良い訓練の場となりました。

QBSの2年間は、学びと刺激の連続でした。この2年間、経営に関して包括的に学ぶことができただけでなく、幅広い専門性を持つクラスメイトの多様な意見から多くを学びました。これまでに、広報、グループ各社の経営コンサルティング業務、M&Aの調査業務、海外事業支援等を担当してきましたが、どの業務においても、QBSで学んだことが活かされています。

また、今年の4月からは、新たに当社が統括するグループ全体の人材育成を担当することになりましたが、ここでもQBSで培った「人とのつながり」が大変役立っています。修了後も学びは続きますが、QBSで学んだことや人とのつながりを通して、今後のキャリアがどのように広がっていくのか楽しみです。

QAN役員交代

5月17日土曜日にQAN総会が行われ、新しい理事メンバーが専任されました。新会長には9期仲前浩之さんが選出されました。仲前さんは先輩・後輩にかかわらず知名度NO.1で、幅広いQBS人脈でQANを引っ張っていただけると期待しております。副会長は8期丸美和さんと9期日高美治です。丸美さんは事務方の細かい仕事を本当に縁の下の力持ちで支えています。日高は広報担当です。会計は10期長野圭太郎さんと日比野晶子さんにご担当頂きます。特に今回の人事は新任14名、内10期生が7名とたくさん新しいメンバーに加わっていただきました。新しいメンバーは1期の田村圭志さん、4期魯近さん、5期小栗康生さん、6期出田貴宏さん、岡本洋幸さん、8期神野寛文さん、9期許真珠さん、10期足立憲正さん、森口昌彦さん、石松かおるさん、大塚由希子さん、唐瑞霞さんと会計のお二人です。1年間どうぞよろしく願います。

日高 美治(9期生)

QAN便り

今期、QAN会長を務めさせていただきます、9期生の仲前浩之と申します。

今年度は「マジる」というキャッチフレーズを造りました。これには2つの思いがあります。ひとつは幅広く交流を深めたいという思いです。QANの1期から10期までの会員同士、特に九州を離れ東京を中心とした関東圏に在住する100名を超える会員との交流、そしてQBSの現役の学生と教員との交流の3つを中心とするものです。そしてもうひとつの思いは、QANでの活動に真摯に真剣に取り組むということです。

今年度から、全期から理事を選出することを新たに会則に加え、まず制度を整えました。あとはこれに我々ひとりひとりの心・思いを注いでこれからもっと同窓会の縦のつながりを深めていきたいと考えております。皆様の益々の応援、よろしくお願い致します。

QAN新会長 仲前 浩之(9期生)



QANは「QBS Alumni Network」の略で、QBS修了生のネットワーク組織として活動し、現在の会員数は379名です。

FM福岡イブニングビジネススクール

昨年度開催し、好評を博した「イブニングビジネススクール」を、今年度も計6回の予定で開催します。既に、今年度の第1回(通算7回目)を、去る4月23日にFM福岡本社会議室で開催し、50名近くの方々が参加されました。まず最初に、久留米大学の塚崎教授から、「黄金時代を迎える日本経済 ～消費税を乗り越えて～」と題した講義が、続いてQBS岩崎教授から、「京セラの経営哲学から学ぶビジネス・人生のヒント ～成功の方程式と人生の法則～」と題した講義が行われ、それぞれ参加者との間で活発な質疑応答が行われました。

今後は、6月、7月、9月、11月に開催する予定です。具体的な日程や登壇者については、決定次第、QBSやFM福岡のホームページ、あるいはFM福岡で平日朝8時50分頃から放送されている「BBIQ モーニングビジネススクール」内でお知らせします。「ビジネスを学んでみよう」と思い立った多数の方々のご参加をお待ちしています。

12期生38人が入学

4月5日(土)、QBS12回目となる入学式が九州大学国際ホールにて行われました。当日はあいにくの空模様でしたが、入学式に続くガイダンスを含め3時間超の長丁場となるセレモニーを経て、新入生38名が新たなスタートを切りました。

在校生紹介



新川 善子さん(11期生)

所属▶西日本シティ銀行

「学びたいときがそのとき」

私がQBSに入学したのは、自分の仕事ぶりに限界を感じ、その状況をなんとか打破したいと思ったことがきっかけです。任される仕事に対し、もっと効果的な方法や、違う考え方があるのではないかと考えるうち、「このまま自分なりのやり方を続けていては時間がかりすぎる。必要な知識やスキルを、体系立てて学びたい」と思うようになっていました。

そんな私にとって、働きながら学べるQBSは、今まで気付かなかったのが不思議なくらいびびったりの場所でした。

一年が過ぎた現在、思い切って飛び込んだことは正しかったと実感しています。個人的に情熱的な先生方や、仕事にもQBSにも懸命に取り組むクラスメイト達から、「自分ももっと頑張らなければ」というポジティブな刺激とモチベーションを得ています。

学校と仕事の両立は、周囲の方々の理解とサポートで成り立っているという感謝の気持ちを忘れず、この2年間で有意義なものにしたいと考えています。



田崎 行範さん(11期生)

所属▶西日本新聞社

西南戦争を報道するために設立された西日本新聞。それから137年という長い年月が過ぎた今、インターネットによる情報の無料化やライフスタイルの変化による新聞離れが深刻化し、業界を取り巻く環境は厳しさを増しています。その新聞社に身を置く私としては、「歴史を閉ざしたくない」「将来にわたり地域に貢献できるメディアでありたい」との思いからQBSの門を叩きました。

QBSでは、経営全般に関する知識を体系的に学ぶことができるほか、ビジネススクールらしいケーススタディでの実践的な意思決定法や海外ビジネススクールからの留学生との共学による刺激など、幅広い範囲で「気づきを得る」機会が与えられます。

個人的には、学んだことや気づいたことを「自社に置き換える」ことで、「自分ごと」でできたことが一番の収穫であったように思います。

残りの1年間、できるだけ多くの知識をインプットし、それを自分の頭で考え抜く力を身につけたいと思います。